

細部への目配りをゆるがせにするな。

「神は細部に宿る」というとおり、細かい部分まで丁寧に描写した文章は、生き生きとして、私たちを魅了します。

今回は、細部に注意が行き届いた文章の力強さや、書くことと観ることの関係性などについて紹介していただきました。

新聞を読んでいて「細部をゆるがせにしない文章」に出あうことが少なくなってきた。一つのものごとを、前後左右から見、細部を粗末にしない作品に仕上げられる。そういう文章に出あうことがずいぶん少なくなってきた。お前さんはどうだといわれれば、黙ってうつむく他はないけれども。

不世出の画家、熊谷守一は長い間、庭に寝ころび、アリやハチの姿を眺めるのが好きな人だった。ある日「アリがどの足から動きだすかがやつとわかった。左側の二本目からだ」と叫んだそうだ。じつくりと確認することの大切さは、絵画も文章も同じだろう。

「細部への目配り」で参考にしたのは、たとえば作家の向田邦子、幸田文といった人たちの文章だ。向田に「犬の銀行」という随筆がある。文庫本5ページほどの短編だが、日本犬・鉄が存分に活写されていて、何回読んでもあきない。

犬の習性だろう。鉄は犬小屋のそばに穴を掘り、くわえてきたものを埋めて隠している。ある日、穴を掘り返すと、たくさんのコレクションが出てきた。向田はその中身をきちんと書く。「子供の運動靴、スリッ

パ、男物靴下（いずれも片方）、古びた歯ブラシ、ビールの栓、たわし、魚の頭、牛骨、洗濯ばさみ、ガラスのないめがねの枠。あえて洗濯ばさみ、ビールの栓などの名を並べることで、話に現実感が出ている。

愛犬・鉄はやがてジステンパーで死ぬ。「意識がほとんど無くなっているのに、名前を呼ぶと尻尾を振り、力無く私の手をなめたのが哀れだった」と向田は書く。これも「細部への目配り」だろう。

なきがらを箱に入れ、「動物慰霊塔」に送る日、一緒に見送ってくれると思っていた母は、買い物に行ってしまう。「案外、薄情なんだ」と思っていた。

が、夕方帰ってきた母は、目を赤くして「辛くて泣いて泣いて泣いたのよ」という。細部をゆるがせにしない筆によって、鉄は名文の中によみがえった。

「細部への目配り」にかけては、幸田文も横綱級で、「木のきもの」というこの人の随筆は、その細密観察のねちっこさにたじろぐ思いだ。

たとえば、スズカケの木の肌には色の

濃淡が複雑に入りまじっており、染め模様のおもしろさ、精巧さがあるという。さらに、その色は「うす茶、もう少し濃いいうす茶、みどり、みどりがかった灰色、と四種がまだらになっていた。染めもかなり高級な染めといえる」とも書いてある。生きものの細部への目配りは、生きるものの「いのち」への目配りであり、その目配りの過程で、観察する側と観察される側との距離は極度に狭まる。

絵でも文章でも、細部を見つめ続けることは基本中の基本だ。アリのいる光景を描いた熊谷の絵を見れば、それがわかる。

●たつの・かずお

朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。

